

近代における町家建築・屋敷構え・町並みの形成

— 和歌山県橋本市中心市街地の文書・図面・棟札・幣串より —

Development of townhouse, residence, and townscape in the modern era : Thorough historical architectural documents, drawings, *Munafuda* and *Heigushi* in the downtown of Hashimoto, Wakayama

梅嶋 修
UMEJIMA Osamu

キーワード: 建築費、祝儀、古材、職人、伝統
Keywords : Construction costs, Donation, Old timber, Worker, Tradition

This research, in accordance with historic architectural documents and drawings from the modern era (1910's to 1940's) identified in the city of Hashimoto, Wakayama prefecture, focuses on clarifying the outline of each construction work, maintenance methods of residence, and the transition process of townscape. Furthermore, the research discusses the backgrounds of how designs had been altered in terms of the local community structure and townscape within the early modern to the modern era.

Analyzing Hashimoto's modern architectural documents and drawings indicates that modern architectural construction works had been based on pre-modern culture and social structure.

In other words, existing historic townscapes are not only fragmentary group of each era's architecture and residences but also, by absorbing new culture and succeeding pre-modern architectural culture, existing historic townscapes are developed with continuous and gradual changes.

内容の要旨

本論は和歌山県橋本市中心市街地の町並み調査で確認された近代（大正時代から昭和時代初期）の建築関連文書・図面類を参考に、各建築工事の沿革、屋敷構えの整備手法、町並みの変遷過程を明らかにし、近世から近代にかけての地域社会構造や町並みにおける造形の変遷背景について考察を行うものである。

論考は個別の建物から建物が集まる敷地（屋敷構え）へ、そして家々が連なる町並みへと変遷過程の研究対象を推し広げ

ることを前提とし、次に挙げる全6章から構成されている。

1章「近代の普請・建築文書に見る町家の建築総費用と祝儀の関係 昭和9（1934）年建築 上田家住宅中央棟の場合」では、橋本地区に立地する上田家住宅中央棟（昭和9・1934年建築）について建築関連文書の整理を行い、近代の地方在郷町における町家の建築総費用と（地縁・血縁関係者より施主へ贈られた）祝儀の関係から建築工事を通じた地域社会構造の変遷を考察している。

一連の上田家文書を整理した結果、近代における町家の建築工事に際して、祝儀として贈られた金銭・物品の合計金額が建築総費用の約1割にも達する例のあることを明らかにしている。建築資金を他人の負担によって補うことは相互扶助・団体的共同奉仕といっても過言ではなく、近代における町家の建築工事においては、祝儀という慣習を通して「普請」本来の言葉の意味である「広く関係者に請う」の行為が踏襲されていると指摘している。但し、その行為は、近世に行われていた労働力の供給ではなく、全て金銭・物品の提供に留まるものであったため、近代の町場における「建築」は貨幣経済の下に成り立っていることも否定はできないが、「普請」本来の言葉の意味からは完全に脱し切ってはならず、このような意味で上田家中央棟建築工事は「普請」と「建築」の両側面を未だ備えたものと論じている。

2章「近代橋本の普請・建築文書に見る古材の使用 旧木村家住宅に見る町家の建替え」では、東家地区に立地した旧木村家住宅主屋（大正3・1914年建築）について、文書の記述と実際の建物を比較することにより、建築工事に至る背景と、実際の建築計画がどのような意図をもって行われたのかを考察している。

木村家には主屋の前身建物が写る古写真が残され、主屋外観は前身建物を良く踏襲したが、木村家に残された3種の「平面図」より、内部は再三に渡り検討を加え、周到に計画されたことを明らかにしている。また、文書の記述と実際の建物を比較した結果、延べ7回に渡る「見積書」を重ねることで安価良質な材を選出すると共に、二階管柱・小屋組材等、二階以上の材木は見積の時点で既に古材の使用を前提としたことを明らかにしている。上記した金銭的な遣り繰りや古材の使用箇所に加え、橋本で頻繁に起きた大水の記録を勘案した結果、当建築工事は大規模な水害復旧に関わるものであったと考察している。

3章「橋本における屋敷構えの変遷 池永家文書を中心として」では、橋本地区に立地する池永家住宅について、建築関連文書・図面類をもとに明治時代後期から現代に至るまでの屋敷構えの変遷を明らかにし、町並みにおける一軒の敷地内に存在する建物群がどのような過程で整備されてきたのかを考察している。

文書・図面類を整理した結果、池永家住宅における屋敷構えの整備は、明治時代末期の隣地取得から現在の姿をほぼ整える昭和時代初期まで20年以上の歳月をかけて、敷地内建物を継続的に更新することで行われたことを明らかにしている。

このような屋敷構えの整備手法は近代の橋本における他の町家でも確認されるため、同地区では通例的な手法であったと考察している。加えて、仮住居・仮倉庫の必要性、建築費用との関係性等を勘案すれば、町並みにおける生活基盤を維持しながら屋敷構えを整備する効果的な手法の一つであり、近世以来、営々と行われ続けた行為と考えるのが妥当と論じている。

4章「普請・建築文書と町家・町並みに見る伝統の継承 近代橋本の普請・建築文書の事例より」では、近代の建築関連文書類をもとに、橋本の建築工事と職人達の関わりを整理し、同年代における橋本の町並みの形成過程について考察している。

文書整理の結果、同一敷地内の各建物は同一職人集団によって工事が行われる傾向にあり、橋本における建築の需要と質を考慮すれば、地域に存在する高い技術を有した職人集団はごく僅かに限定されると指摘している。高い技術を有する職人集団内では棟梁交代等によって技術の継承が行われ、技術の内容と水準が保持されたが、町並みにおいては、このような限られた職人集団が同様の形式と特徴を持った町家を建て続けることで、結果として長い年月の中、町家の伝統的な形式が形成・継承されたと論じている。更に敷衍して全国の歴史的町並みにおいても、地域に存在した職人集団によって地域毎に特徴ある町並みが成立し、それら一連のものが伝統として定着されるに至ったと考察している。

5章「棟札・幣串の編年 和歌山県橋本市中心市街地の棟札・幣串」は附章として取り扱うもので、文書・図面類以外に施工が残した建築関連史料である棟札・幣串に焦点を当て、橋本で確認された全ての棟札・幣串を整理し、その編年を行っている。

棟札・幣串はその性格上、建築本体と年代がほぼ一致すると考えて差し支えない。このため、一定地域において数量を得ることで編年を試み、年紀を欠く棟札・幣串もこの指標に照合させることで、建物本体の建築年代を推測することが可能であると指摘している。また、棟札・幣串による編年は建物の種別、用途に関わるものではなく、建築形式、外観が大きく異なる建物でも、同じ指標を用いた編年が可能であり、町並み調査における有用性を指摘している。

6章「結」は全体の総括と結論を述べている。近世と近代の建築文化には社会構造の変化に伴った相違が少なからず認められるものの、橋本における近代の文書・図面類を通して明らかとした祝儀による「普請」本来の意味の踏襲、立地条件に対する屋敷構えの整備手法、技術を担う職人達による伝統的形式の形成・継承等を見る限り、近代における建築工事は、近世以前の文化・社会構造が基盤にあると論じている。

即ち、現在見ることのできる歴史的な町並みは、単に各時代における断片的な建築物・屋敷構えの集合体ではなく、近世以前からの建築文化を踏襲しつつ、新たな文化を摂取しながら、連続的に緩やかな変化を受けて成立した造形であると結論付けている。